

水田と養蚕の省力により酪農をめざして

長野県伊那市御園494

宮下のり雄

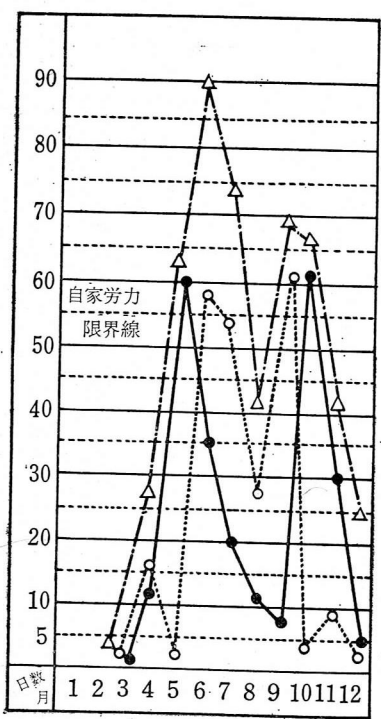
酪農研の第一五回研究会が昨年札幌市において開催され、宮下さんは、はるばる上伊那地区代表として参加され、見事三位に入賞されました。その経営の内容がすぐれていることは申すに及びませんが、発表の言葉も、「お田植え」「夏のお照り」などいかにも瑞穂の国の歴史がにじみ出たものでした。

この伝統ある日本の農業の中に日本的酪農が力強く根をおろしつつあることを眼のあたりに拝聴しましたので、読者の皆様にも御紹介いたします。

一 酪農をめざした動機

私の住む伊那谷は、長野県南部に位置して東に南アルプスを頂き、

谷の中 央には 天竜川 が流れ ており ます。 耕地は 河川の 流域と 山合いの 狭い 耕地で すが、



第2表 昭和32年度の月別労働表

第1表 経営概況

A 家族構成			
続柄	年齢	労働力	人数
父母	62才	0.5人	2人
兄弟	57才	0.3人	1人
妻	35才	1.0人	1人
妻妹	28才	1.0人	1人
長女	17才		
二女	4才		
計			2.8人
B 耕地			
水田	110アール	桑園	16アール
飼料畑	20アール	合計	146アール
C 家畜			
搾乳牛	3頭	仔牛	1頭
鶏			15羽
D 建物設備			
住宅	30坪	作業場	20坪
倉庫			15坪
畜舎	75坪	運動場	10坪
サイロ			3基
E 機械器具			
モーター	1HP	同	2HP
カッター			1
尿ポンプ	1	モミ摺機	1
精米機			1
粉砕機			1
脱穀機			1
このほか			37年8月に脱穀機1、モーター1、吹上カッター1、尿撒布機を共同購入。

水田を除く以外は、火山灰土という悪条件の上に、海拔六〇〇〜九〇〇㍎の高冷地に属する農業地域であります。私の家の経営の概況は、第一表の通りであります。昭和三十年頃の私の耕地は、水田一〇〇㍎、桑園三〇㍎、その他二〇㍎で、水田と養蚕の収入のみで、生活をしておりましたが、経済の成長と消費経済は、年とともに発展して、農業収入とのバランスは、漸次崩れてまいりました。その当時の収入は約六〇

牧草と園芸 十一月号 目次

水田と養蚕の省力により酪農をめざして……宮下のり雄 頁

トビック 頁

夏型牧草 ローズグラス…… 頁

現地ルポ 火山灰地の酪農を見て 松原 守 頁

火山灰地土壌の農業的特徴…… 頁

アメリカの除草剤…… 頁

使用区分一覧表 頁

養鶏養豚と草利用……斎藤 久幸 頁

有利なニラの促成栽培 岡田 晟 頁

読者のページ レスペテザ…… 頁

会社だより 頁

一種苗木生産課より…… 頁

雪印がお奨めする 育成選抜品種の解説 頁

かんらん 印サクセション 頁

かんらん 札幌大球…… 頁

表紙写真 釜谷牧場 頁



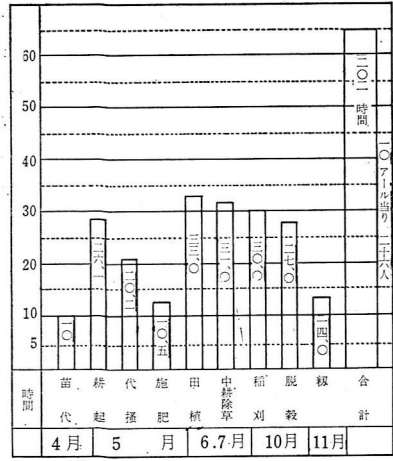
北海道上磯郡に釜谷牧場がある。設立後の日も浅いが、近くの渡島当別トラピスト修道院今村神父始め多くの方の指導を受けて牛はよくふとり、立派なものであった。今後も雑木林の斜面を拓いて草場が伸びることであろう。

万円で、その内訳は、水稲四〇万円、養蚕一万円その他が三万円でした。また、これらに投下した労力をみますと、第二表（月別労働表）のように、自家労働力の限界を越え、しかも非常に波が高いことが解りました。なかでも水田の五月と十月、養蚕の六、七、九月とは、多忙を極めたに反し、その他の月は、比較的ひまが多いことでした。このように収入と労働にムラのある経営をつづけていましたが、たまたま、国の方針として桑園の減反政策が実現されるようになり、養蚕部門の縮小にかかわる酪農に決意して、昭和三十三年一頭購入いたしました。これが私の酪農への一歩でもありました。ところが乳牛一頭のことですから、飼料の栽培計画から労働の配分などについても十分な検討がおこなわれていなかったため、かえって忙しく、苦勞した割合に、経済効果がうすかったです。

二 農業労働の分析と改善

そこで何故効果が少なかったかを労働の

部面から分析してみましたところ、第一に養蚕部門ではまゆの生産費の内五六・五％も労働費となっており、その内九七％は自家労働であります。この労働投下の状況は、第三表（齢期別養蚕労働表）のようでありました。また水田におきましては、第四表のように、一〇ヶ当たり所要時間二〇二時間のうち、五月上旬の耕起より六月中旬の除草までの一カ月間に五六％の一三三時間余を費し



第4表 水田の作業別労働時間

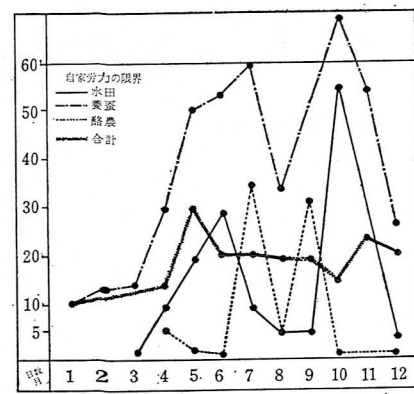


第3表 齢期別養蚕労働の割合

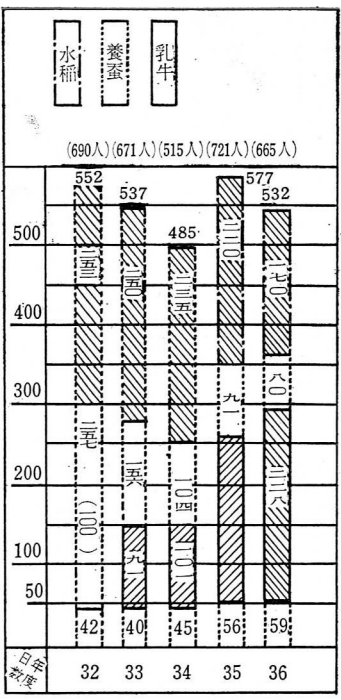
ておりました。このように、水田と養蚕の労働が一時的に重なり合う上に多くの労働が必要となりますために、どうしても雇傭労働力を必要としますが、これも安易に求めることができませんでした。そこで次のように労働の配分の計画を樹てました。まず計画の遂行に当たりましては、一、無理二、無駄 三、ムラをなくすることを主眼といたしました。その結果、一、養蚕部門については、春蚕を全廃とし、夏秋蚕のみとし加えるに飼育の方式を省力条桑飼育、桑園の牧草による間作を行ない、除草労働の削減を図ることにしました。二、水稲部

門については、畜力を機械化に進め、品種も早・中・晩生と組み合わせ労働力の調整を図りました。その結果、當農全体の労働力は、三十二年度と三十三年度の差は六〇日、三十二年度は一〇一日、三十五年度は一九九日、三十六年度は二四四日と何れも著しく減少いたしました。また養蚕部門では、三十二年度に年間の労働力は二五七日でありましたが、三十六年度には僅か三一日に減少いたしました。このように毎年省力されてきました。本年は有志三名と水稲の共同作業（苗代・中耕除草）を始めました。ところが、労働力の配分が著しく改善されたので、本年六月搾乳牛一頭購入し三頭の搾乳を開始し、いよいよ多頭化の道が開けました。

三 飼料の自給計画と実施

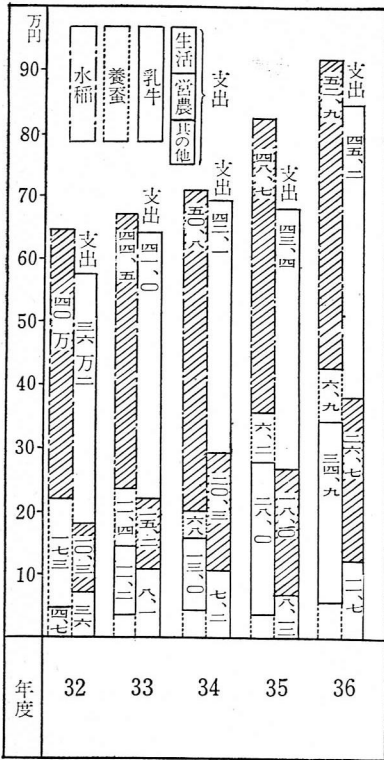


第5表の2 36年度別労働表



第5表の1 年度別労働表

イレージ用（ライ麦三三、レンゲ二〇、イタリアンライグラス四〇）播種しております。また一部は水稲の裏作であります関係上、青草給与及び乾草用にも利用しています。そのほか、飼料専用ほとして、畑一〇ヶを当て、青刈トモロコシを中心とし、七、九月に、水田一〇ヶにはラディノクローパーのほ場として、田畑りんかんを行なっています。また桑園の間作は、桑樹の生育を阻害しない品種を主体としています。一方、山野草、畦畔の野草は主に、乾草に調



第7表 年度別収入

用途別	作物名	面積	収量	月													
				1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
水田裏作	サイロ用	ライ麦	30	9,000kg													
	"	レンゲ	20	7,500													
	"	イタリアン	20	7,000													
	生草用	イタリアン	20	7,500													
計				31,000													
飼料専用圃	生草用	ラデノク	10	8,000													
		青刈トモ	10	500													
		カブ	10	300													
計				8,800													
桑園間作	生草用	グラスダ	5	1,000													
		エン麦	6	1,500													
		カブ	5	1,500													
計				4,000													
乾草	養蚕	養蚕		750													
		イタリアン	5	200													
		野草	20	300													
計				1,250													

第6表 飼料作物の作付並に給与表 (S36年度)

収支の推移

次に私の家の農業粗収入の割合と推移について述べてみますと、第七表のようであります。酪農を志した昭和三十二年と三十三年度との農業粗収入を比較しますと、水稲では三二%の増収、養蚕では五九%の減収(減反のため)、酪農部門では二〇%の増収となっておりますが、全粗収入では、四ヶ年間に五二%も増収となりました。また、乳代に対する購入飼料との割合は、三十三年度は四五・五二、四二〇円であったものが、三十六年度には、三六% (一二四、四〇〇円) と九%程度減少してまいりましたので、酪農への自信をますます高めてまいりました。

四 将来の目標と計画

最後に将来の目標を昭和四十年年度におき、生活を文化的な楽しい家庭を造るためには、生活費として最低五〇万円を必要といたしますので、多様な養蚕部門の全廃とともに酪農部門の規模を搾乳牛五頭とし、年間サイレージ給与方式と、フリーバー折衷方式の採用による省力経営の確立、一方自給飼料は多肥省力栽培による集約化の度を一層進め、水田酪農の合理的な労働配分を以て、私の酪農を多頭化へと実現出来るものと確信いたしました。このように、私の経営も逐次上がっておりますことは、指導者の方々のねんごろな御指導のたまものと深く感謝いたしております。今後とも一層と御指導下さいませようお願い申し上げます。私のお返事をさせていただきます。

夏型牧草
ローズグラス

トピック

原産地は南アフリカで、一八九五年頃セル・ローズ卿によって栽培し始められたが故にこの名を有している。台湾に於て柳川が大正二年二月初めてフィリピンから輸入したもので、四月に播種し五回刈して一〇ヶ年たり一万キモを挙げている。

ヒゲシバ属で本草は茎が細く葉は極めて多く、草丈一〇〇〜一二五センチの永年草で穂はメヒシバに類似しているが、分枝が多く一〇〜一五、種子生産も多い。分枝により株を増大、また匍匐茎を有し、各節から発根して新植物を作ることが出来る。

耐寒性が低く一五〜一八度F以下では殆ど越冬しない。早魃に耐えるが、湿潤土壌に適する。砂質土壌を好みアルカリ土壌に強い。

栃木県西那須野で行なった栽培試験によると、五月十四日播種、全面散播一キモ一〇ヶで、七月二十日、八月二十一日、九月二十五日、十月二十五日の四回収穫で、青刈収量八・五ト、乾草重一・六トの多収を示し、風乾率が極めて高いことが判明した。また多肥栽培により三〇%増収となった。これらの成績をみると、青刈トモロコシ、テオシントよりも夏型牧草として、特に乾草製造用として優れた性質を持つものと考えられる。(抜草)

(栃木県有畜農試・高橋仁技師)